

# Feel the NCGM Plus



国立研究開発法人  
国立国際医療研究センター

NCGM通信

2025.3.18

Vol.14

12月～2月（季刊）



## Japan Institute for Health Security

2025年4月1日、「JIHS」がスタートします

### CONTENTS

02 臨床試験推進に関する包括連携協定を締結しました

03 センター病院の主なできごと

- ・第8回保健システム研究グローバルシンポジウム2024が長崎で開催され、国立健康危機管理研究機構(JIHS)に関するセッションが催されました
- ・コンゴ民主共和国にてエムボックスワクチン接種指導のワークショップを開催

05 センター病院 / 国府台病院診療科シリーズ

センター病院：産婦人科診 / 消化器内科

国府台病院：糖尿病・内分泌代謝内科 / 総合内科 / 心療内科

10 国際医療協力局グローバルヘルスレポート

- ・世界的権威のある国際学会HSR2024長崎でシンポジウムを開催！
- ・ラジオの電波に乗せて～グローバルヘルス・カフェ～
- ・在外職員奮闘記！！ザンビア共和国

## 臨床試験推進に関する包括連携協定を締結しました

国立がん研究センターと、NCGMは、両病院が専門とするがんと感染症領域での多様な臨床試験を推進するための連携協定を締結しました。本締結により、国立がん研究センター中央病院が2015年から医療法に基づく臨床研究中核病院として培った医師主導治験や企業治験、多施設共同試験、国際共同試験、分散型臨床試験（DCT）など、質の高い臨床試験を実施するための知見を基に、国立国際医療研究センター病院を支援し、感染症領域での臨床試験実施基盤の整備等を進め、さらにはがん領域と感染症領域の連携による日本発の革新的臨床開発の推進をめざします。



2024年12月24日署名式の様子

左写真（左から：国立がん研究センター理事長 中釜 斉、NCGM理事長 國土 典宏）

右写真（左から：国立がん研究センター中央病院長 瀬戸 泰之、理事長 中釜 斉

NCGM理事長 國土 典宏、センター病院長 宮崎 英世）

### 発表のポイント

- 国立国際医療研究センターは、2025年4月より国立健康危機管理研究機構（JIHS）として、日本の感染症領域での臨床試験ネットワークの中核を担うため研究開発を推進する基盤等の機能を強化することをめざしています。
- 国立がん研究センター中央病院と国立国際医療研究センター病院は、両病院が専門とするがんと感染症領域での多様な臨床試験を推進するため、臨床試験推進に関する連携協定を締結しました。
- 本締結により、国立国際医療研究センター病院における臨床試験実施基盤の整備を促進し、両病院のノウハウの連携により、がん領域と感染症領域の革新的臨床開発のさらなる推進をめざします。

### ■プレスリリース

詳細は[こちら](#)からご覧ください

## 第8回保健システム研究グローバルシンポジウム2024 (HSR2024)が長崎で開催され、国立健康危機管理研究機構 (JIHS)に関するセッションが催されました

(寄稿)企画戦略局 特任研究員 大塚 美耶子

11月19日に、HSR2024の『パンデミックの予防・準備・対応と保健システムの強化を連携させるためのJIHSの役割』というセッションで、NCGMから国土理事長が、国立感染症研究所（感染研）から脇田所長が登壇されました。

セッションの前半には国土理事長によりJIHSが出来た背景や、NCGMの国内外での活動、特に新型コロナウイルス感染症パンデミック禍における役割について説明されました。その後、感染研の脇田所長からはパンデミック禍において感染研が直面した課題が共有され、次いで新機構のJIHSの立場や役割、各セクターの役割の具体的な内容や関係部署・関係機関との連携について説明がありました。



セッションの後半はハーバード大学公衆衛生学の教授やベトナムのコミュニティ支援機関の先生、WHOのAlliance Welcomesの代表取締役を交えてのパネルセッションが行われ、JIHSのあり方、JIHSを設

立する際に考慮することなど建設的な意見交換が行われました。最後に国土理事長と脇田所長から、「JIHS創設のために最善をつくします。」という宣言がありました。



右から:

Prof. Michael Reich, Harvard T.H. Chan School of Public Health

NCGM 国土理事長、NIID 脇田所長

Dr. Kumanan Rasanathan, Executive Director, WHO Alliance for HPSR

## コンゴ民主共和国にてエムポックスワクチン接種指導のワークショップを開催

(寄稿)国際感染症センター国際感染症危機管理対応推進センター(GIC) 特任研究員 東島 紋子

2024年12月、国際感染症センター（DCC）国際感染症危機管理対応推進センター（GIC）は、氏家無限センター長、松澤幸正運営室室長、臨床研究センターのMuchanga Sifa Marie Joelle上級研究員、Marlinang Diarta Siburian特任研究員の4名をコンゴ民主共和国（DRC）へエムポックスワクチン（LC16m8）接種に関する短期的な技術支援を目的として派遣しました。

まずは、DRC保健省を訪問し、感染症アウトブレイクに関する重要会議への出席およびPHEOC（Public Health Operations Center）を視察し、現地のエムポックス発生状況ならびにワクチン接種状況などの説明を受けました。

また、国立生物医学研究所（INRB; Institut National de la Recherche Biomédicale）において、現地の専門家を対象にエムポックスワクチン接種の講義と実技指導（ToT; Training of Trainers）を行いました。ToTには約80名が参加しており、LC16m8に対する関心も高く、活発な議論が交わされ、有意義なトレーニングとなりました。

今回構築されたネットワークを活かし、今後、日本および世界でのエムポックス対策の強化に努めてまいります。



産婦人科では主に女性を対象として広範囲な医学・医療を扱います。2つの「多様性」、すなわち一つは女性のさまざまなライフステージに関わる時間的多様性、もう一つは生殖・内分泌、周産期、腫瘍などの領域的多様性を軸として診療しています。NCGMのミッションでもある「すべての病態に対応でき、誰一人取り残さないこと」をモットーとして、NCGM産婦人科では取り扱う周産期、腫瘍、生殖・内分泌、女性医学（女性ヘルスケア）の全ての分野において、質の高い医療を提供すべく、各領域の専門医を揃えて、学会の修練施設に認定されております。

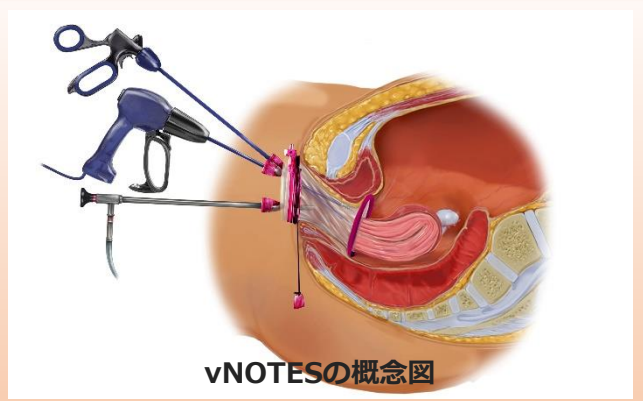
産科では、他科との連携を生かし各種合併症妊娠の管理や母体救命が必要な疾患にも対応する一方で、合併症のないローリスクな妊産婦に対してはできるだけ自然な分娩を心がけています。また2年前より経産婦限定で無痛分娩を導入し55例を成功させ、2024年は初産初産婦さんへの導入を開始いたしました。分娩件数は近年の少子化に伴い全国的には減少傾向ですが、当院は横ばいで推移しております。地域周産期母子医療センターとして、小児科に6床のNICUを有し、妊娠24週以降の母体搬送が受入可能です。2023年は295件の分娩を管理し、21件の母体搬送を受け入れました。



婦人科では、年間約40例の悪性腫瘍手術（再発、上皮内がんを除く）を行っており、癌専門病院では手術が受けられない合併症のある方も受け入れています。昨年は一般病院としてはかなり件数が多い、婦人科浸潤がん症例65例の初回治療を施行しました。早期子宮体癌あるいは良性疾患に対しては、内視鏡手術あるいはロボット支援下手術（ダビンチXi使用）を積極的に行い、早期離床・退院を推進しております。昨年より高難度手術に分類されている傍大動脈リンパ節郭清を伴う子宮内膜がん症例に対しても腹腔鏡手術を導入開始いたしました。また3年前よりお腹に全く傷のないvNOTES手術（経腔的腹腔鏡手術）による

卵巣手術あるいは子宮全摘も導入し、現在では年20件以上施行しております。また子宮筋腫および子宮内膜症などの手術が必要な不妊患者さんに対しては、腹腔鏡手術と体外受精をはじめとする高度生殖医療を組み合わせたハイブリッド治療に対応し、妊娠成立後は分娩までシームレスに対応します。2022年4月より生殖補助医療（体外受精）が保険診療となり、今まで敷居の高かった体外受精を受けられる方が増えました。少子化の中でも女性特有の問題に最適なケアができるよう、疾患中心ではなくその女性を中心に、またその女性の生涯を見据えた医療を提供しています。

(産婦人科診療科長 大石 元)



## センター病院診療科 シリーズ No.36

## 消化器内科

消化器内科は、センター病院で最も規模の大きな診療科です。当科では消化管疾患（内視鏡治療）、肝疾患、胆膵疾患、化学療法の各分野における専門医や学位取得者がおり、臨床および若手の育成にも力を入れています。特に、消化管出血、胆管炎、膵炎などの救急疾患を広く受け入れています。特に消化管出血については24時間365日内視鏡治療が行える体制を整え、救急科や放射線科の協力も得て、都内トップクラスの救急車の受け入れを行っています。消化器がんなどの悪性疾患に対しても、診断、治療だけでなく退院後の生活の支援まで、多職種で全人的なサポートを行っています。

(消化器内科部門長 山本 夏代)



## 国府台病院診療科 シリーズ No.1

## 糖尿病・内分泌代謝内科

糖尿病・内分泌代謝内科では糖尿病・脂質異常症・肥満症・内分泌疾患の診断・治療を行っており、糖尿病診療においては、持続血糖モニターやインスリンポンプなどの最新機器を導入し、千葉県東葛地域の拠点病院として活動しています。さらに当科は総合内科・リウマチ膠原病科・循環器内科・呼吸器内科と共に、統合内科の一員として一般内科疾患の診療も行っています。患者さんの身体状態・併存疾患・生活状況・社会的サポート体制などを総合的に考慮し、個々の患者さんに最善の医療を提供することを心がけており、複数の疾患を併存した高齢患者さん、精神疾患を併存する患者さん等を、各診療科や部門と協力しながら疾患横断的に対応することに習熟しています。若手教育においても糖尿病や内分泌疾患など専門領域での診療はもちろん、内科医としての総合力を養うことも重視しています。



また、当科では臨床研究・治験センター長である柳内秀勝副院長の下、様々な臨床研究を取り組んでいます。臨床での気付き・疑問を、研究を通じて検証することを目指し、毎年10報以上の原著論文の他、国内外の様々な学会でも積極的に発表を行っています。

国府台病院の特徴を活かし、今後も診療・研究の発展のため邁進していきたいと思えます。引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

(糖尿病内科医長 勝山 修行)

## 国際庭園の様子

ボランティアの皆さんが集まり、季節ごとの草花の手入れをしてくださっています。国際庭園は、皆さんの手で美しく保たれ、訪れる方々に癒しのひとときを提供しています。

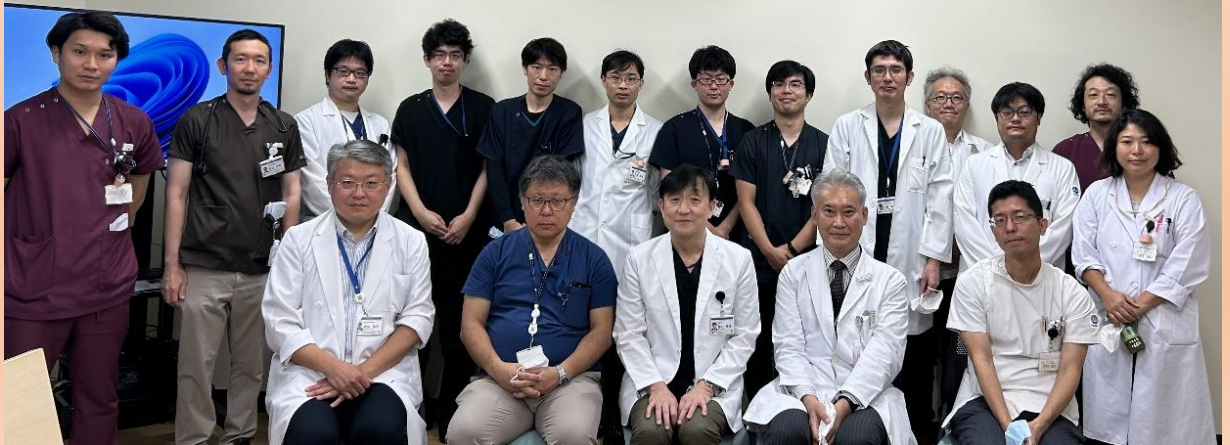


## 国府台病院診療科 シリーズ No.2

## 総合内科

当院は大きな病院ではないため、心療内科と消化器・肝臓内科以外の各内科で毎朝一緒にカンファレンスを行うなど、連携しながら診療にあたっています。血液や神経等、カバーできない領域もありますが、一方でいろいろなプロブレムを持った患者さんを各科で相談・協力しながら診療できる利点もあります。難しい病気や重症患者を診るというよりは、誤嚥性肺炎や尿路感染症や電解質異常等の一般的な疾患の治療にあたっています。精神疾患の合併を含めてバックグラウンドのやや複雑な患者さんが比較的多く、また低栄養やADL低下を伴うことも多いため、看護師だけでなく、MSW、管理栄養士、リハビリ等、多職種と協力しながら診療にあたり、またNutrition Support Team等の様々な活動にも参加しています。

(総合内科診療科長 酒匂 赤人)



写真：毎朝合同カンファレンスを行っている総合内科、リウマチ・膠原病科、呼吸器内科、循環器内科、糖尿病・内分泌代謝内科のメンバー

## 1月6日、NCGM仕事始め式が行われました

国土理事長は昨年1年間を振り返り、NCGMが取り組んだ多岐にわたる活動とその成果について述べました。

令和6年は、能登半島地震への対応に始まり、ウクライナからの医師の研修受け入れ、新病院長の就任など、さまざまな出来事がありました。また、NCの評価において“総合評定A”という高い評価を得るなど、喜ばしい成果も多数報告されました。



最後に、国土理事長は「組織統合を経て、これまでとは次元の異なる組織へと進化したい」と抱負を語り、「JIHSスピリットを胸に共に頑張りましょう」と力強いメッセージを送りました。

### 国府台病院心療内科：摂食障害治療の最前線

国府台病院心療内科は、DPC（Diagnosis Procedure Combination）調査において摂食障害の入院患者数で7年連続日本一を誇り、全国から多くの患者さんを受け入れています。

当科の医師は全員が内科医としての経験を持ち、特に身体合併症を伴う摂食障害の診療に強みを発揮します。摂食障害の患者さんは、精神的な苦しみに加え、低栄養や体重減少による様々な身体的な問題を抱えていることが多く、心身両面からの包括的な治療が不可欠です。そのため、当科では院内の精神科、内科、外科、救急科と緊密に連携し、看護師、公認心理師、薬剤師、管理栄養士、リハビリスタッフなど多職種と協力して、患者さん一人ひとりに最適な治療を提供しています。

また、当科は次世代の心療内科医育成にも力を入れています。現行の臨床研修制度に加え、内科・救急科・精神科での勤務経験を持つ医師が心療内科医を目指すための専門的なトレーニングプログラムを提供し、心身医学の発展に貢献しています。

平成29年からは千葉県摂食障害支援拠点病院（旧：千葉県摂食障害治療支援センター）として、地域における摂食障害支援の中核を担っています。令和3年からは、全国の摂食障害患者さんとそのご家族を対象とした電話相談窓口「全国摂食障害支援センター相談ほっとライン」を運営し、疾患の予防、早期発見、早期治療を促進しています。

国府台病院心療内科は、これからも高度な専門性と温かいケアで、摂食障害に苦しむ方々を全力でサポートしてまいります。

（心療内科診療科長 河合 啓介）



## 国際医療協力局グローバルヘルスレポート

世界的権威のある国際学会HSR2024長崎でシンポジウムを開催！

(寄稿)国際医療協力局 上級研究員 松岡 貞利

保健政策・システム研究分野において世界的権威のある国際学会（HSR 2024年11月長崎にて開催）においてシンポジウムを開催いたしました。

タイトルは「迅速な意思決定のための信頼できる最新の保健人材情報のデジタル化：夢か現実か？

-フランス語圏アフリカ諸国の経験」。保健人材の適切な養成や配置等を目的として、アフリカ諸国を含む多くの低・中所得国で保

健人材情報のデジタル化が進んでいます。

今回は、セネガル、トーゴ、コンゴ民主共和国の保健省から登壇者を招き、各国におけるデジタル化の進捗状況、導入・普及・拡大における促進・阻害要因についてご発表頂きました。

当日、会場はほぼ満席となり、発表後には登壇者と聴衆との議論も活発に行われました。



登壇する松岡上級研究員



シンポジウム登壇者・関係者

## JIHSプレサイトを公開しました！

2025年4月、国立感染症研究所（NIID）と国立国際医療研究センター（NCGM）が統合し、「国立健康危機管理研究機構（JIHS）」が誕生します。

「JIHS」は世界トップレベルの「感染症総合サイエンスセンター」として、感染症をはじめとする様々な疾患、健康危機から人々を守ります。

1月15日、JIHSプレサイトを公開しました。「[こちら](#)」からご覧ください！



# 国際医療協力局グローバルヘルスレポート

ラジオ日経第1

## ラジオの電波に乗せて ～グローバルヘルス・カフェ～

国際医療協力局 連携協力部 連携推進課長 グローバルヘルス・カフェ マスター  
田村 豊光

# グローバルヘルス カフェ

国際医療協力局は、グローバルヘルスに関する様々な話題を一般の皆さまに提供し、国際医療協力局の機能や役割、政府開発援助の意義、ひいては世界の健康課題に関心を寄せていただくことを目的に、ラジオ番組を活用しています。「グローバルヘルス・カフェ」と題した番組を、ラジオ日経第1放送で10年以上継続しています。

とあるカフェに見立てて田村がマスター役、国際社会経済研究所

理事長の藤沢久美さんが常連客役となり、時には局員、時にはビル&メリンダ・ゲイツ財団日本代表や令和6年能登半島地震で自らも被災された石川県輪島市の漆芸家など多彩なゲストにご出演いただき、世界の健康問題について語り合ってきました。

この番組は2025年3月をもって終了しますが、今後も一般の皆さまに向け広報活動を積極的に展開して参ります。



写真 1



写真 2

写真 1 収録の様子、左から常連客の藤沢さんと田村マスター

写真 2 収録後の記念撮影

モニターに映っているのはWeb参加いただいたゲストの国際医療協力局元部長、  
グローバルヘルスカフェ前マスター明石 秀親さん

### ■ ラジオNIKKEI

<https://www.radionikkei.jp/globalhealth-cafe/>

※4月以降の番組終了後もラジオNIKKEIの番組サイト（Podcasts）で、過去の放送全てお聞きいただけます。



## 国際医療協力局グローバルヘルスレポート 在外職員奮闘記！！ザンビア共和国

Vol.24

-宮本国際医療協力局長と藤田連携協力部長が、  
ザンビア「ルサカ郡総合病院運営管理能力開発プロジェクト」の活動を視察しました-  
国際協力機構(JICA)「ルサカ郡総合病院運営管理能力開発プロジェクト」

長期派遣専門家 村井 真介(歯科医師)

NCGM国際医療協力局は、アフリカ、東アジアの低・中所得国を中心に、保健医療の専門家を長期にわたって派遣し、それぞれの国の保健医療の向上のために、様々なプロジェクトを展開しています。

また、それぞれのプロジェクトをを担当する専門家の活動を支援し、プロジェクトを円滑に進めるため、日本から視察団や短期の専門家を派遣し、国際医療協力局がチームとしてプロジェクトを進めています。

私は、本プロジェクトの長期派遣専門家として、2024年5月にザンビアに赴任し、前任の専門家からプロジェクトを引き継ぎました。

本プロジェクトは、2021年5月27日に開始し、現在、出口戦略を話し合う段階にさしかかっています。

今回視察に訪れた宮本局長と藤田部長は、11月7日と8日の2日間にわたり、プロジェクトオ

フィス、プロジェクトの対象病院のひとつであるカニャマ一次レベル病院、ルサカ州保健局を訪問し、プロジェクト関係者にJICAへの専門家派遣等を担う国際医療協力局の役割を説明するとともに、プロジェクトの進捗状況や課題と出口戦略について意見交換を行いました。

膨大な数の患者さんに対して限られた資源を有効活用して日々診療に取り組まれる病院の方々の働きに感銘を受けるとともに、プロジェクト関係者の力強いコミットメントを確認できた訪問となりました。



視察の様子  
右から三人目宮本局長、四人目藤田部長

本号に掲載の集合写真等は、撮影時のみマスクを外しています。



企画・発行：  
NCGM 広報企画室



[https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM\\_Plus/index.html](https://www.ncgm.go.jp/aboutus/FeeltheNCGM_Plus/index.html)

バックナンバーはこちらからご覧いただけます。